Vol.21

# 渡辺泰男＋インテルストゥディオ｜ノヴィラーラの家［1993］

Yasuo Watanabe

中村好文＝イラスト、写真も
Yoshifumi Nakamura

食堂の片隅にしつらえられたピザ窯。輻射熱で焼くため2時間ぐらい前から薪を焚いて窯全体を熱しておく。渡辺さんは火の世話も、ピザの出し入れも堂に入っていて、いつでも「ピザ屋のオヤジ」になれそう

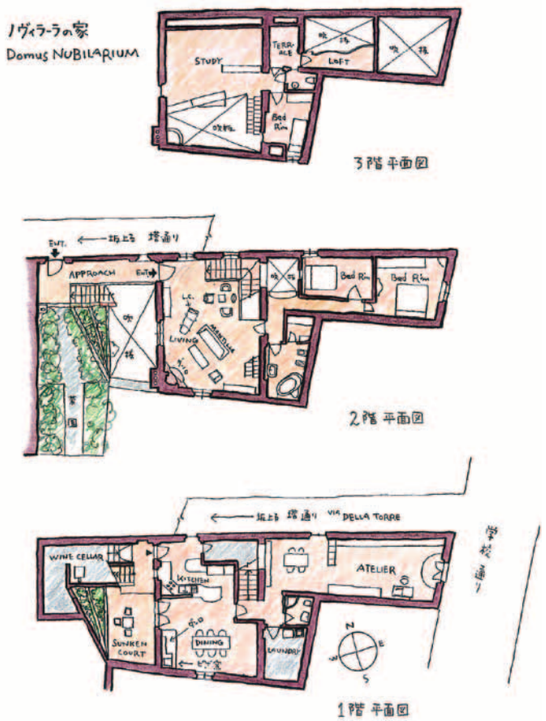
今からちょうど40年前、伊丹十三の『ヨーロッパ退屈日記』という本の中で「イタリーびいき」という言葉に出会いました。

その言葉に刺激され、心誘われて、初めてイタリアを訪れて以来、私も筋金入りの「イタリアびいき」になってしまいました。村や町の小さな教会や修道院を訪ね歩き、ジオットやシモーネ・マリティーニやジェンティーレ・ベッリーニの絵の前にたたずみ、名だたる大聖堂やカルロ・スカルパの建築空間を歩き回り、お気に入りのバールやリストランテで過ごす人生の愉しみをおぼえたのです。贔屓が高じて8年ほど前には『イタリアの歓び』という本の出版の片棒もかつがせてもらいました。

そんなわけですから、じつはこの連載がスタートしたときから、いつかはイタリアの建築家の自邸を取りあげたいと考えていました。それも新築ではなく、できれば古い建物を改修した住宅を訪ね、修復と改修の手法やそこでの暮らしぶりをつぶさに見学したいと考えていたのです。そしてそのことを、以前、アンジェロ・マンジャロッティ事務所で働いていたことのある友人の諸角敬さんに話しますと、「打てば響く」迅速な対応で、ノヴィラーラで古い建物を改修して住んでいる渡辺泰男さんを紹介してくれました。

–

3月中旬に予定していた見学は、東北地方を襲った大地震と大津波、さらにはあの原発の事故に追い打ちをかけられ、5月まで延期になりました。でも、訪問の季節としてはそのほうが良かったようです。見学当日の5月8日は、雲ひとつない爽やかな五月晴れで、ヴェネツィアからアドリア海沿いにあるペザロまで3時間ほど、車窓を流れる美しい新緑の野山の風景を眺めているうちに、大災害と原発の惨状にすっかり打ちのめされ、滅入っていた気持ちは、慰められ、癒されたのでした。




［建築概要］名称：ノヴィラーラの家｜所在地：イタリア・マルケ州ノヴィラーラ｜家族構成：夫婦｜敷地面積：183.67m²｜建築面積：132.33m²｜延床面積：283.53m²｜規模：地上3階｜構造：RC造｜設計：渡辺泰男+インテルストゥディオ

渡辺泰男さんのお宅は、最寄りの駅のペザロから車で15分ほどのノヴィラーラという丘の上の街にあります。その渡辺さんが、ペザロ駅に車で迎えに来てくれていました。渡辺さんは、ちょっぴり苦み走った風貌と物静かな雰囲気をお持ちで、時代劇ならきらびやかな着物の旗本役というより、野武士、または用心棒の役がよく似合いそう…というのが初対面の私の印象でした。

–

ノヴィラーラは「丘の上の街」と書きましたが、街全体は大きさも形も、陸上競技のグラウンドぐらいで、集落全体が城壁によって台地のように支え上げられていて、楕円形の桶（おけ）を逆さに伏せたようだと書いたら分かりやすいかも知れません（イラストの鳥瞰図を参照してください）。

城壁の高さは高いところで8～10メートルぐらい。その城壁に1ヶ所、立派な城門があります。かつては跳ね橋を備えたその城門の下をくぐらずにこの街に入ることはできなかったそうです。跳ね橋を上げれば、街全体を外部から遮断し、要塞化できる仕組みになっていたのです。

渡辺さんの家は城壁内部をぐるりと取り巻く道路に面しています。この道路は一周が約400メートルだそうですから、それこそ陸上競技場ですね。先ほど書いた城門は渡辺さんの家の目と鼻の先。道路に面して渡辺さんの仕事場（アトリエ）の入口扉があります。住宅の入口はここではなく、建物の右脇をすり抜ける「塔通り」側にありますが、「塔通り」は登り坂になっているので、入口に辿り着くまでの間にほ

彼方にアドリア海を見晴るかす城門。渡辺さんの寝室の窓からも、この絶景を望むことができる。街をグルリと取り巻く城壁は手摺りの高さまでで、素晴らしい眺望は遮られていないところが気に入りました

このアトリエの入口扉と2階寝室の窓は、1600年代初頭の絵画にも描かれているという

「開口部を塞ぐ場合はそこに開口部のあった痕跡を残し、いつでもオリジナルの状態に復元できるようにする」のがイタリア式改修の規則と作法

「塔通り」から一歩踏み入れると右手奥で建物の西立面が出迎えてくれる。一番上が書斎の窓、その下が居間の窓。煙突は暖炉用とピザ窯用の集合煙突

アプローチ・ブリッジからサンクンガーデンを見おろす。囲まれたスペースは屋外の居間として活用されている

ぼ1階分の高さを登ることになります。つまり、住宅には2階から入ることになるわけです。「塔通り」に面した扉は一種の門扉（ゲイト）で、ここからまず庭先に入り、サンクンガーデンを右手に見おろしながら、アプローチのブリッジを渡るとそこが住宅の入口です。

さて、ここで、渡辺さん一家がこの建物に住み着くことになった経緯と改修工事の内容を、簡単に紹介しておきましょう。

–

20数年前、渡辺さんは友人の別荘に招かれてこの街を訪れ、この街の佇まいと、アドリア海を見晴るかす素晴らしい眺望にすっかり魅せられました。その後、たまたま、この街の歴史的地区（ヒストリックセンター）に、この屋敷が売りに出ていることを知り、これを手に入れたいと思いました。売家といっても600年以上も前からある建物のことですから、傷みは相当はげしく、当然ながら当初から大々的な改修を前提にしての決断でした。このあたりの事情について、渡辺さんはこの作品を雑誌に発表した際に簡潔な文章で表現していますので、引用させてもらいます。

–

私が仕事の場をイタリアに移して以来、持ち続けていた夢は、新築ではなく、旧い家を自分の手で改修・改造して住んでみたいということだった。周りの歴史的環境に配慮しつつ、決められた形とヴォリューム、厳しい法規制の中で、解決策を見つけていく過程は、たいそう厄介なものだが、新しい場所に、新しい建物を計画する場合とは違った、建築家としての本当の手応えを感じることができる。（『住宅特集』1994年4月号）

–

…そう考え、夢見ていた渡辺さんが、この街と、この建物に巡り会ったのですから「出会うべくして、出会った！」ということになるのでしょう。話を聞きながら、私は、渡辺さんの小指と、築後600年の陋屋（ろうおく）がピーンと赤い糸で結ばれている様子を心中ひそかに思い浮かべて、思わず微笑んでしまいました。

ところで、建物と土地を手に入れる話がトントン拍子で進んだかというと、そうではなかったようです。もともとこの街はエトルリア文明時代まで溯れるほどの歴史があり、建物も1600年代初頭の絵画に描かれているぐらいですから、いざ、購入の手続きを始めてみると相続人（地権者）が32人も(!)いることが分かり、その追跡調査と交渉に3年近い歳月を費やしたとのこと。そして、ようやく土地と建物を取得すると、そこには改修工事というさらなる大仕事が待ち受けていました。イタリアでは歴史的建築物の改造や改修には厳しい法的制限が課せられるので、それをクリアするのに大変な時間と労力を要したのです。改修にあたっての法的制限は大まかには次のようなものでした。

1. 現状の屋根形態を変えてはいけない。
2. 延床面積、空間のヴォリュームは現状を超えてはいけない。
3. 内部の基本構造壁、階段の位置は歴史的建築物の類型を残す意味から変えてはいけない。
4. 現状の開口部の位置、形、寸法、材質を変えてはいけない。もし現状の開口部を塞ぐ場合は、そこに開口部があったことが分かるように開口部の痕跡を残すこと。

渡辺さんは、これらすべての条件をひとつひとつクリアし、歴史的建築物の改修のお手本になるような「ノヴィラーラの家」を、1993年1月にめでたく完成させました。

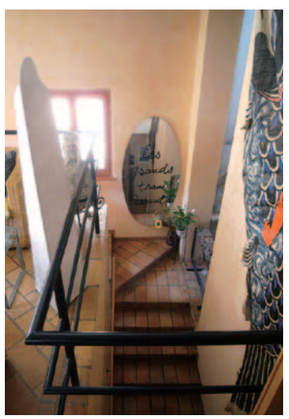
渡辺さんが「この建物を改修して自分の自邸にしよう！」と発心してから、5年の歳月が経っていました。

–

「ノヴィラーラの家」は予備知識として読者に伝えておきたいことがたくさんあって、誌面を大分費やしてしまいました。ここからは駆け足で、内部を見ていきます。

先ほどサンクンガーデンのことを書きましたが、もともとそこは空地（くうち）だった場所なので、大量の土を掘り出して1階レベルまで掘り下げたことになります。おかげでもとは地下室で倉庫ぐらいにしか使い途のなかった暗く湿った場所が、陽の光の射し込む素晴らしく気持ちの良い食堂に生まれ変わりました。私は、今回、1日半ほど滞在させてもらいましたが、起きている時間のほとんどをこの食堂で過ごすことになりました。ここにはサンクンガーデンならではの包み込まれるような安堵感があり、「外部と内部」を意識することなく過ごすことができます。そして、この食堂で特筆しておきたいのが、この部屋の重心となり、居心地の良さの決め手となっている暖炉とピザ窯です。この食堂には「洋風の茶の間」的な気さくな雰囲気が漂っていますが、その雰囲気を濃厚に醸し出してくれるのが、暖炉とピザ窯、そして、お人柄にどことなく「肝っ玉かあさん的」な包容力と温もりを感じさせてくれる光代夫人の存在なのです。この日の夕食のメインディッシュは、このピザ窯で焼いた渡辺家ご自慢の特製ピザだったのですが、黄昏時から渡辺さんが甲斐甲斐しく薪と火加減の世話を始め、台所では奥さまがせっせとピザの下ごしらえをしている様子を眺めているだけで「美味しい取材」という言葉と「役得」という言葉が、交互に脳裡を駆け巡りました。また、言うまでもなく焼きたて「もっちり味」のピザは絶品で、こちらは一緒に飲んだモデナ産のLAMBRUSCO（発泡赤ワイン）と手をつなぎ、スキップして胃の腑を駆け巡りました。

さてさて、いよいよ誌面が尽きてしまいました。2階の居間については、外観からは想像できない大らかでダイナミックな空間が待ち受けていたこと。そして、その居間の床に既存の建物に使われていた何百年も前の古煉瓦が敷きつめられ、それが念入りに研ぎ出されることによって見事に「再生」されており、その絵画のように見事な色彩と風合いに目を瞠る思いをしたこと。また、サニタリールームには選び抜かれたモダンなデザインのバブルバスや洗面器や便器などが備えられ、それらが天窓から射し込む穏やかな自然光を浴びて、隠れ家的な居心地の良さを醸し出していたことを、特筆しておきたいと思います。書き残した発見と感想は、またいつか、別の機会に！



階段室の見おろし。この階段の位置も階段右脇の壁もオリジナルのまま。この壁の扱いがプランの決め手となっている

夕食の準備の整った食堂。ピザ窯もぬくぬくと暖まり、あとはゲストを迎え、ピザを入れるだけ。嵐の前の静けさ(?)

ああ、このバスタブや洗面器や便器（残念ながら写っていません）が、INAX製品だったらなあ、デザインコンテストに応募できるのになあ…

書斎への階段途中から居間の見おろし。ソファとローテーブルは高浜和秀氏のデザイン、アームチェアはマルセル・ブロイヤー、そして黒猫が独り占めにしている寝椅子は、言わずと知れたル・コルビュジエのシェーズ・ロング。この家具のラインナップを見ただけで建築家の住まいということが分かるはず。暖炉の真下の位置に食堂のピザ窯がある

**なかむら・よしふみ**——建築家／1948年生まれ。
武蔵野美術大学建築学科卒業。1972–74年、宍道設計事務所。1976–80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
主な作品：三谷さんの家［1986］、REI HUT［2001］、伊丹十三記念館［2007］など。
主な著書：『住宅巡礼』［新潮社／2000］、『住宅読本』［新潮社／2004］、『意中の建築 上・下』［新潮社／2005］、『Come on-a my house』［ラトルズ／2009］、『普通の住宅、普通の別荘』［TOTO出版／2010］など。